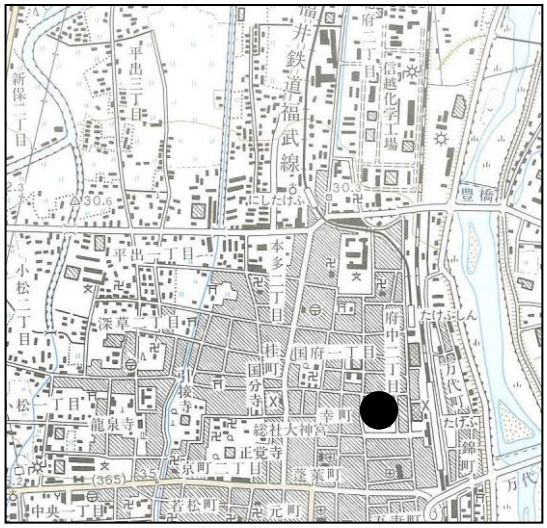
16. 府中城跡（I地点）

所　在　地：越前市府中一丁目 13-7
調査原因：市役所本庁舎建設
調査期間：平成 28 年 8 月 26 日
　　～平成 29 年 3 月 31 日（継続中）
調査主体：越前市教育委員会
調査面積：3,000 ㎡
時　　代：近世・近代



位置図（S＝1/25,000）

調査の概要　市役所本庁舎建設に伴う調査で、調査開始にあたり、平成 26 年度に計画地内で試掘調査を実施しました。その結果、２層の遺構面が検出されたことから、今回の調査に至りました。第 1 層目は、市役所駐車場面から深さ 60 ㎝から 100 ㎝の地点で検出され、この層の年代は出土遺物から江戸時代後期の層であることがわかりました。また、調査範囲のうち、市民ホール、生涯学習センター、武生東公民館のあった場所については、建物基礎が地下深くにまで及んでいたため、発掘調査対象範囲から除外しました。

今回調査を行っている付近は、中世の朝倉氏が置いた府中奉行所に始まり、これを前田利家が府中城として拡大し、慶長６年（1602）、本多富正が府中領の領主となると、その館を置き周辺に侍屋敷や足軽屋敷を配置するなど町全体を整備しました。近代においては、本多家の学問所を前身とする進脩小学校、武生東小学校の校地として利用され、昭和 30 年以降は市役所の庁舎として利用されてきた場所です。

現在調査途中であるため、全体像は明らかとなっていませんが、調査区の東側部分（市役所別館北側）からは、堀跡と考えられる部分が検出され、ここからは流紋岩と河原石が見つかっています。流紋岩は石垣の石と考えられ、河原石は石垣の裏に込められた「栗石」と考えられます。現状では崩壊した状態での確認でした。（奥谷博之）

写真１　調査区東側調査風景
大きな石が流紋岩で、石垣の石と考えられる。その背後に小さい石が見え、栗石と考えられます。栗石は石垣の裏面に充填し土圧を軽減したり、内部に浸み込んだ石を排水させるために入れたものです。